

＜書評論文＞

構築主義論争における 研究者主観をめぐる 構造的ジレンマ

Gale Miller and James A. Holstein
(eds.),
*Constructionist Controversies:
Issues in Social Problems Theory*
(Aldine de Gruyter, 1993)

高山龍太郎

1 本書が刊行されるまでの経緯と 問題の所在

スペクターとラベリング論の論客の一人であったキツセによって開拓された構築主義の社会問題論は、それまで社会問題論の中で支配的であった機能主義的社会問題論に対抗して、ラベリング論のバースペクティブを社会問題の分野に応用し精緻化することで生まれてきた。すなわち、ラベリング論が逸脱の生成を逸脱というラベルを貼るという定義活動によって説明するのと同様に、社会問題というラベルを貼る定義活動によって社会問題が構築されると構築主義バースペクティブは見なすのである。この立場を定式化したとされるスペクターとキツセの『社会問題の構築』では、社会問題は次のように定義される。「社会問題は、なんらかの想定された状態について苦情を述べ、クレームを申し立てる個人や

グループの活動である[Spector and Kitsuse 1987[1977]:75=1992:119]」。つまり、構築主義の社会問題論は、「客観的」状態を考慮の外において、社会の成員がその状態を社会的に解決されるべきだと主張するとき、彼らによって行なわれる多様な定義活動の総体を社会問題と見なし、その活動の相互作用過程を研究するのである。

この構築主義の論争については、既に紹介がある[鮎川 1993、中河 1994]。本稿では、それを研究者の主観をめぐる構造的ジレンマというかたちで再考していきたい。

この構築主義の社会問題論をめぐる論争は、「誰も客観的状态を知ることはできない」という相対主義的な前提に起因する。一般に、社会問題に対するあらゆる発言は、潜在的に、客観的状态に対する自分の認識が正しい、という主張を含んでいる。それらの発言は、「社会問題の客観的状态はただ一つであり、その問題を解決する最も有効な方法が一つ存在している」という一般の人々の常識に訴えかける。そして、自らの認識こそが客観的状态に他ならないと主張することで、自らの正当性を確保しようとする。人々は、客観的状态に関する自分の見解と、発言に含まれる客観的状态に関する主張を比較することで、「どの発言が一番真実に近いか」という判断を行なう。一方、構築主義の社会問題論は、「誰も客観的状态を知ることはできない」という前提によって、発言の真実性に関する判断を一切行なわない。社会問題に対する発言は、すべて主観的な状況の定義と見なされ、リアルさにおいて差異がない。もちろん、社会学者も例外ではない。社会学者による社会問題の研究も、この前提によって、主観的な状況の定義の一つとして扱わなければならない。したがって、社会学者の社会問題の研究も、政

政治家の発言も、市民運動家の主張も、テレビの報道も、主観的な状況の定義である点ですべて同列である。しかし、社会学者は、社会問題に対する人々の定義を検討することによって自分の社会問題像を構成し、成果を発表するのである。つまり、社会学者が社会問題の研究を行なうということは、社会学者以外の人々による様々な主観的な状況の定義を、社会学者が自らの主観的な状況の定義によって統合することである。このように考えると、社会学者の状況の定義は、その他の人々の状況の定義と同列に扱えないことが分かる。社会学者の定義は、その他の人々の定義よりも、論理的に一つ上位の階層に位置せざるを得ないのである。

本書の中の論争は、この構造的なジレンマをどのように解決するかをめぐって行なわれる。つまり、論争の焦点は「誰も客観的状态を知ることはできない」という前提から導かれる「社会学者による状況の定義を他の状況の定義と同列に扱え」という要請と、「社会学者の状況の定義を他の状況の定義よりも論理的に一段上の階層に置かねばならない」という研究活動の必然性との間に、いかに折り合いを付けるかという点におかれる。論争の端緒となった、ウールガーとポーラッチ[Woolgar and Pawluch, 1985.]の「存在論的概念区分のごまかし(ontological gerrymandering)」の批判は、構築主義のバースペクティブを用いる研究者たちがこのジレンマに無自覚であったことを指摘するものである。

ウールガーとポーラッチは構築主義の経験的研究を吟味して、それらに共通のロジックを抽出する。彼らによれば、構築主義の研究者たちは、第1に、社会問題と目される状態を同定し、第2に、その状態についての多様な定義を同定し、第3に、状態の定常性と定

義の変化性の対比を強調する。そして、状態は変化していないのだから、定義の変化は、状態の変化自体に起因するよりも社会環境の変化に起因していると結論する、という。ウールガーとポーラッチは、このような構築主義的説明が、定義の変化を正当化するために、状態が恒常的であるという仮定に依存している、と指摘する[ibid:215]。状態が恒常的であるという仮定は研究者による客観的状态についての恣意的な想定である。したがって、客観的状态について研究者の判断を留保するとする構築主義の指針から逸脱しているということができる。このように、すべての客観的状态の存在について考察しないと述べながら、状態の中に恣意的な区分を設け、ある種の状態の存在を認めるようなごまかしを、ウールガーとポーラッチは「存在論的概念区分のごまかし」と呼んでいる。結論として、彼らは、「存在論的概念区分のごまかし」は客観的状态と状況の定義を対比させるような社会学的説明に不可避の特徴であり、そのような袋小路から抜け出すためには社会学のレトリックを検証する必要があることを示唆する[ibid:224-225]。

2 本書の内容

本書の構成

以上が構築主義の論争に至るまでの概略であるが、同じアルダイン社から1993年に、構築主義の社会問題研究を再考する意図で、ミラーとホルスタインによって『*Reconsidering Social Constructionism*』という論文集が刊行された。ここで紹介するのは、その本の論文の一部に、新しい論文を加えて学生向けに再編したものである。

第1章は、これまでの構築主義の流れを整理した編者によるイントロダクションである。第2章以降は2部構成になっている。「社会的構築主義における今日の課題」と題された第1部では、最初に、議論のたたき台として構築主義の再定式化を目指すイバラとキツセの論文が示され、それに対して各論文がコメントを行なう。第2部は「社会的構築主義への新たな方向性」と題され、エスノメソドロジーやフェミニズム、ポスト構造主義などの考え方を取り入れることによって、構築主義のプログラムを拡張しようとする様々な示唆がなされている。

イバラとキツセによる回答

まず、この本の中心的論文であるイバラとキツセ(Ibarra, Peter R. and John I. Kitsuse)による「道徳的言説の日常言語的構成要素：社会問題研究のための相互作用論者の提言(Vernacular Constituents of Moral Discourse: An Interactionist Proposal for the Study of Social Problems)」の内容を紹介しておきたい。彼らは、ウールガーとボーラッチの批判に答えるために、「状態カテゴリー(conditions-categories)」という新しい概念を提起し、「クレイムのレトリック研究」という新しい方向性を打ち出している。

まず最初に、スペクターとキツセによる最初の定式化の中で、「想定された状態(putative conditions)」の語を採用したことが、ウールガーとボーラッチの批判に端を発する1980年代中頃の客観-主観論争の原因の一端であったと振り返っている[本書:23]。というのは、スペクターとキツセが、想定された社会状態についてのクレイム申し立て活動を研究せよ、と言った場合、クレイム申し立て活

動それ自体の研究の代わりに、クレイムの指し示す対象(例：児童虐待)が研究される可能性を残しているからだ[本書:25]。

イバラとキツセは、このような混乱を引き起こした「想定された状態」の語の代わりに、「状態カテゴリー」の語を用いることを提案する。「状態カテゴリーとは、社会的に境界線を引かれた活動と過程の類型化(「社会」による社会の内容の分類)であり、実際の文脈の中で用いられることで社会的リアリティの有意な記述と評価を生み出す[本書:26]」と定義される。状態カテゴリーとは、特定の社会問題がいったい何についての問題なのかを社会のメンバーが提唱するために用いられる言葉なのである。この概念によって、研究者は、クレイムを申し立てる人が自らの状態カテゴリーによって分節化された世界のうちの、自らが問題であると考え部分に対してクレイムを申し立てる、と捉えることになる。今まで「想定された状態」の「状態」の語が暗に示す客観性に引きずられて、単一の状態というものがメンバーによって共有されているようなニュアンスが残っていた。しかし、クレイムを申し立てる人が何を問題であると考えているかを一義的に決定することは不可能である。文中の例を挙げるならば、妊娠中絶に反対する人々が「本当に」問題であると感じているのは道徳的退廃であるかもしれないし、殺人や淫らさかもしれない。「状態カテゴリー」という新概念によって、社会のメンバーによって社会問題が定義されるという点が明確になり、「状態の定常性」のような「客観的」状態に関する仮定を研究に紛れ込ませる危険を減らそうとするのである。

イバラとキツセは、特定の対象における社会的構築の研究は、結果的に「存在論的概念区分のごまかし」に陥ると考えている。した

がって、構築主義を一貫した形で進展させるためには社会問題の言説の理論を発展させることこそが必要だと提案する。つまり、彼らにとって構築主義の課題とは、象徴的に境界線を引かれた社会的現実、すなわち、状態カテゴリーを、社会のメンバーが異なった方法で知覚・記述・評価し、それに基づいて行動する様子を研究することである[本書:29]。このように考えるイバラとキツセは、論文の後半部分で、クレイムを申し立てる際に状態カテゴリーに関連づけて用いられる意味づけのパターンであるレトリックを分類・整理している。

イバラとキツセの再定式化に対するコメント

次に「社会的構築主義の今日の課題」と題された第1部の3章以降を見ていく。

第3章は、ギュブリウム(Gubrium, Jaber F)による「用心深い自然主義に向けて(For a Cautious Naturalism)」という論文である。ギュブリウムは基本的にイバラとキツセの論文に賛成している。ただし、イバラとキツセの枠組みがマスメディアを通じたクレイムの公共性を前提にしているために、クレイムが公共性を得ていない状態から公共性を得て社会問題を構築する過程を扱うことのできない、という方法論上の課題を指摘する。そして、ギュブリウムは、日常の相互作用における日常的な解釈活動にも同様の力点がおかれるべきだ、と主張する。

第4章は、ボルナー(Pollner, Melvin)による「構築主義の反射性と再帰性の構築(The Reflectivity of Constructionism and the Construction of Reflexivity)」という論文である。彼は、イバラとキツセの修正を評して、調査「主題」の定式化からは客観主義を完全

に追い出したが、「分析」の水準では依然として客観主義を温存している、と述べる。修正版においても依然として、構築主義の研究行為それ自身を構築主義的指針の対象とするという再帰的考慮が欠けているというのである。ボルナーは、このような課題に答えるために、再帰性の社会学、すなわち、社会学的論証のエスノグラフィーを発展させる必要があることを説く。同時に、客観主義が社会学の基礎となっている以上、そのような試みが不完全に終わるだろうと指摘している。

第5章は、ボーゲンとリンチ(Bogen, David and Michael Lynch)による「社会問題の一般理論は必要か(Do We Need a General Theory of Social Problems?)」という論文である。彼らは、イバラとキツセの一般理論への志向性を問題にしている。ボーゲンとリンチは、エスノメソドロジーやワイトゲンシュタインの成果を引用しながら、彼らと社会問題の間にある社会のメンバーによって構成された関係があたかも一貫した哲学や理論によって基礎づけられているかのように考えることに意味があるのかどうかを問題にしている。ボーゲンとリンチは、イバラとキツセが社会運動や公的論争に特有の言語ゲームを研究しようとする点を称賛しているが、「包括的枠組み」の可能性については疑問視している。最後に、ボーゲンとリンチは、特定の社会的・歴史的環境の中で社会問題が現れるときのとりとめない活動を研究していくことを提案している。

第6章は、ベスト(Best, Joel)による「この話はこれくらいにして、さて次の話題に移りますが：社会問題の厳格な構築主義的解釈の限界(But Seriously Folks: The Limitations of the Strict Constructionist Interpretation of Social Problems)」という論文である。イバラとキツ

セのような経験的世界についての一切の仮定を認めない立場を、ベストは厳格派の構築主義(strict constructionism)と呼ぶ。この立場は、ウールガーとポーラッチによる批判以後の認識論的な関心の高まりによって生まれてきた。ベストは、厳格派の指針によって経験的世界を言及しようとするとき必ず理論的な一貫性が損なわれてしまうので、厳格派の構築主義は事例研究への道を閉ざしてしまっていると批判する。厳格派の立場に対するのが、コンテキスト派の構築主義(contextual constructionism)と呼ばれる立場である。コンテキスト派は、統計その他の情報を用いることでクレイムの評価を行うことができるとし、その評価を分析の重要な一部分として扱う。そして、認識論的な一貫性よりも社会生活についての知識の増大を優先する。ベストは、この立場を取ることによって、経験的世界についての様々な興味深い社会学的な問を發することができると述べる。つまり、ベストは、認識論の一貫性を保つためにあまりにも大きな代価を払うことをやめて、経験的世界に向かうことを提案するのである。

構築主義の新しい方向性

第7章は、ホルステインとミラー(Holstein, James A. and Gale Miller)による「社会的構築主義と社会問題作業(Social Constructionism and Social Problems Work)」という論文である。彼らは、エスノメソドロジック的関心から、「社会問題作業」の研究を提案する。社会問題作業とは、人々が文化的に共有された解釈構造を日常的現実にあてはめることによって社会問題を生み出す過程のことである。この過程は、常に変更され、決して終わることがない。彼らの提案する社会問題作業の社会学とは、

社会問題を生み出す解釈構造と解釈実践の両者に焦点を定めるものである。

第8章は、レスリー・ミラー(Miller, Leslie J)による「裏面からのクレイム申し立て：周縁化と社会問題の分析(Claims-Making from the Underside: Marginalization and Social Problems Analysis)」という論文である。彼女は、周縁性(marginality)の概念を鍵に、ジェンダー・沈黙・クレイム申し立てについてフェミニズム的・ポスト構造主義的に分析する。彼女は、構築主義者たちが公になったクレイム申し立てを強調することは、公になることのできないクレイムを見逃すことになり、社会問題の構築についての不完全な理解を導く、と述べる。彼女の考える包括的なアプローチとは、ある種の社会問題のクレイムが概念化されることを、今日の権力・知識・言説を支配する組織がどのように妨げているか、を考察するものでなければならない。

第9章は、マッコール(McCall, Michal M.)の「批判的フェミニズムの理論と調査における社会的構築主義(Social Constructionism in Critical Feminist Theory and Research)」という論文である。彼は、社会的構築主義が実証主義的な批判によって苦しめられてきたと述べ、この事態を解決するために批判的フェミニズム理論の形態に注目する。批判的フェミニズム理論は、観察するものとされるものの実証主義的な区別を廃し、問題を含む社会状態に関与することを肯定する。マッコールは、そのような理論がフィールドワークと結び付くとき、「実際の批判理論(critical theory in practice)」となり、抑圧的な社会構造を再生産せずにそれらを記述する方法となるだろうと述べる。さらに、彼は、社会問題を変革する政策を提言するよう社会問題の理論家に求めている。

第10章は、グレー(Gray, Herman)の「文化理論、社会的構築と社会問題(Cultural Theory, Social Construction, and Social Problems)」という論文である。イバラとキツセによる構築主義の再定式化は、構築主義内部の論争のみを契機にしたのではなくて、外部の理論、とりわけ文化研究(文学理論・大衆文化の研究・フェミニズム理論など)の発展によってもたらされた社会学の危機的状況を反映しているという。グレーは、このような諸理論の利点を取り入れるために、構築主義のプログラムを拡張すべきである、と提案している。

第11章は、ロスク(Loseke, Domileen R)の「状態・人々・道徳・感情の構築：構築主義の議題の拡張(Constructing Conditions, People, Morality, and Emotion: Expanding the Agenda of Constructionism)」という論文である。ロスクは、状態のみならず、社会問題としての「人」のカテゴリーが社会問題の言説の中でいかに構築されているかを検討すべきだという。また、クレイムが道徳的語りであるだけでなく、好ましい「感情」の方向性を指示するという点もあわせて注意を向けるべきだと指摘する。ロスクは、人と感情に目を向けることによって構築主義の拡張を意図している。

3 論争へのコメント

以上が論文集の紹介である。以下では、若干、意見を述べたい。本書の中心的論点である「誰も客観的状态を知ることはできない」という前提についてこの前提から導かれる「社会学者による状況の定義を他の状況の定義と同列に扱え」という要請と、「社会学者の状況の定義を他の状況の定義よりも論理的に一段上の階層に置かねばならない」という研究活動の必然性との間には、先に見てきた構造

的なジレンマが存在している。社会学者を普通の人々と同列に並べ、社会学者の社会問題の定義を含めた全体を社会学者が研究するという図式は、自己言及的な関係になっている。したがって、社会学者の状況の定義を他の人々の状況の定義と同列に置いて、一つの論理的空間内で議論を行なうには限界がある。社会学者以外の状況の定義が存在する論理的空間のメタレベルに、社会学者の状況の定義を据えることは、論理的な必然なのである。

このように論争の原因である構造的なジレンマを理論的に解決しようとする試みは生産的とはいえない。では、どのように折り合いを付けるのがよいのか。

まず、研究者の状況の定義には、しかるべき特権が与えられるべきである。研究者の義務は、真実の追求ではなく、自分がリアルと感じているものを忠実に再現することである。研究者は、自分の状況の定義に従って、人々の様々な状況の定義を再構成するのである。そして、研究者は、構築主義の原点である経験的研究に戻るべきである⁽¹⁾。構築主義のパースペクティブに理論の一貫性を求めることは論理的に不可能だから、研究者は、社会問題を成り立たせている人々の行動をただ記述するほかないのである。これが、本書の一連の論争を読むことによって得た目下の私なりの結論である。

⁽¹⁾「社会問題に定義を与え、社会問題の経験的研究の基礎を準備することこそが、われわれの目的である。」[Spector and Kitsuse 1987 [1977]:1=1992:5]

参考文献

- 鮎川潤 1993 「『社会問題』『社会病理』への構築主義アプローチ」 日本社会病理学会編『現代の社会病理』 垣内出版
- Holstein, J.A. and G. Miller (eds). 1993. *Reconsidering Social Constructionism: Debates in Social Problems Theory*. Aldine de Gruyter.
- 中河伸俊 1989 1990 「クレイム申し立ての社会学：構築主義社会問題論の構成と展開」 富山大学教養部紀要（人文・社会科学篇）第21巻2号・第22巻2号
- 中河伸俊 1994 「『有害マンガ』と社会問題のレトリック---道徳的ディスコースの事例研究---」 日本社会病理学会編『現代の社会病理』 垣内出版
- Spector, M. and J. I. Kitsuse. 1987[1977]. *Constructing Social Problems*. Aldine de Gruyter. 村上直之・中河伸俊・鮎川潤・森俊太訳 1992 『社会問題の構築：ラベリング理論をこえて』 マルジュ社
- Woolgar, S. and D. Pawluch. 1985. "Ontological Gerrymandering: The Anatomy of Social Problems Explanations." *Social Problems* 32: p.214-227.

(たかやま りゅうたろう・修士課程)